

美的経験と情動

太田陽 (OTA Akira)

名古屋大学大学院情報科学研究科博士課程

近年、心理学・認知神経科学では、絵画を見る・音楽を聴くといった芸術についての美的経験の本性を、情動の測定を通して解明しようとする研究が増えている。これに対して、美学における議論では、美的経験には何らかの情動が必要であるとする立場がある一方で、Noël Carroll は、美的経験に情動は必要ないと主張している。Carroll は、芸術作品の美的経験を、作品のもつ形式的性質や美的性質に対して理解を伴って注意をむけることと同一視しており、例えば、音楽を聴いて楽曲の速いテンポや、活発さ・ダイナミックさに気づくことは、たとえ何らの情動を伴わないにしても、美的経験であると言う。仮に Carroll の立場が正しいとすると、情動をもちいた美的経験についての心理学的研究は、美的経験そのものではなく、たかだか美的経験の付随物を研究していることになる。本発表の目的は、美的経験に情動は必要ない、という Carroll の議論の誤りを示して、心理学による美的経験の研究の可能性を擁護することである。本発表では、まず、Carroll の議論において、美的経験をもつ主体として、批評家や美術史家のような芸術の専門家が暗黙裡に前提されていることを指摘する。そのうえで、専門家は、Carroll の主張するように、情動を伴わない冷静な美的経験をもつことができるとしても、一般の人々は、典型的には、情動を通して対象のもつ性質を知覚しそれに対して評価を下すという仕方で、美的経験をもつことを主張する。さらに、Carroll の想定するような、専門家による冷静な美的経験は、一般の人々による情動を伴う美的経験を前提として成立していることを論じる。